

直接鳥をみて歩かない調査〈自動撮影・自動録音〉

森 茂晃（ホシザキ野生生物研究所）

鳥類の調査研究で基本となる「観察」。直接フィールドに出かけて対象を見つけ、種類を識別して数をカウントしたり、行動や生息環境などを記録したりすることでさまざまなことがわかってくる。ホシザキグリーン財団が環境整備事業で造成した宍道湖グリーンパーク（出雲市）とふるさと尺の内公園（雲南市）では、それらが持つビオトープとしての機能を計る意味でも直接観察を長年続けている。そして、数年前から自動撮影や自動録音による調査も取り入れはじめた。

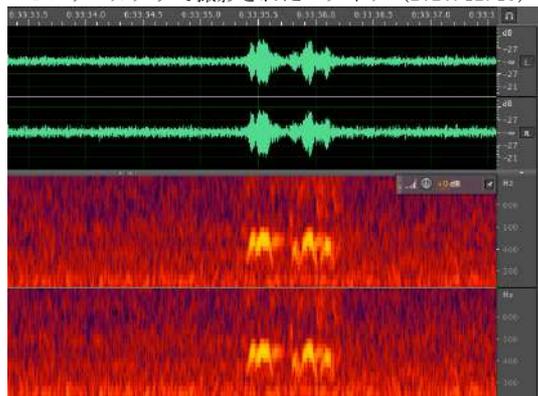
本報告では、自動撮影はセンサーが一体となっているカメラを用いた宍道湖グリーンパークの例を紹介する。使用したセンサーカメラは電池電源のコンパクトなものであり、赤外線による撮影が可能で24時間モニタリングができる。一方、自動録音は、ふるさと尺の内公園においてタイマーで作動時間が設定可能な録音機を用いた夜間録音の例を紹介する。これらの機器を用いた調査の強みは、長期間・長時間モニタリングができることであり、直接観察だけでは気づくことが難しい種の生息やその行動などが明らかになってきている。今回は実際に撮影した画像や音声データの中からいくつかの種をピックアップして紹介する。



センサーカメラで撮影されたヒクイナ（2020.12.15）



センサーカメラで撮影されたヤマシギ（2022.2.18）



自動録音によるフクロウの声（2021.5.22）



自動録音によるホトトギス声（2021.5.22）